

第47号

# ながおだに新聞



## THE NEWS NAGAODANI

Vol.47



発行所

学校法人 東洋学園

長尾谷高等学校枚方本校  
大阪府枚方市長尾元町2-29-27  
〒573-0163 TEL072-850-9111

<http://www.nagaodani.ed.jp/>

e-mail [info@nagaodani.jp](mailto:info@nagaodani.jp)

### 卒業生にむけて贈ることば

## 「真面目な努力が幸せへの一歩」

学校長 小寺 克一

卒業生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。

卒業にあたり一言祝詞を申し上げます。皆さんが在籍したこの時代は、社会的には厳しい風が吹き荒れた時期でもあります。リーマンショックをもたらした世界経済の恐慌は、皆さんを取り巻く環境がいかに厳しいかを教えてくれました。かつてのバブル期と呼ばれた頃の生徒とは、雲泥の差があります。特に、「働く」「職に就く」ということの厳しさは、戦後の経済発展を遂げてきた日本では、半世

紀以上忘れられていたことです。

しかし、物事は、どの角度から眺めるかです。いぶん変わります。確かに今、新卒として世に出るといことは、私の時代ともあなたの方のお父さんやお母さんの時代とも違って、厳しいの一言につきます。けれどもこれはとことん不幸なことでしょうか。甘えを許さない社会の中で揉まれて生きてゆくことは、強い自分を作ってゆくということにおいて、あなた方にとってプラスなのではないでしょうか。一頃、「我慢が足りない、我慢ができない」といわれました。それは、辛抱や我慢しなくても生きていけたからです。しかし今は、違います。この進路が自分に合っているのか、これよりもっとよい進路があるのではないかと迷う前に「社会に慣れて、早く一人前になる」ことを考えなければなりません。



冷たい風や強い風は力強い優れたものを生み出します。「試練は人生の栄養である」と考えて、これからの人生をたくましく生きてください。社会は決して甘いものではありません。



しかし、決して厳しいだけのものでありません。まずはじめに努力することから始めてください。そうすれば、必ず皆さんの前には幸せが訪れると確信しています。そして「学んだことを社会で十分生かす努力を継続していただきたい」という願いを込めて贈る言葉とさせていただきます。これからの活躍を期待しています。

## ホームページに新しいサイトが完成しました!

前号でも案内していましたが、本校の硬式テニス部を紹介するページが完成しました。

練習風景や所属している生徒の紹介、ブログ、活躍の様子などをご覧いただけます。

ホームページは、履修確認や、スクーリングの出席状況を確認するとき、レポートをプリントアウトするときなどに活用していると思います。が、そのときにはぜひ一度、新しいページにもアクセスしてください。

**特技支援 クラス**

スポーツを中心に、個人の特長を大きく伸ばすための支援プログラム

特技支援クラス × TENNIS

New!



# 奈良校が 引っ越ししました!

## 奈良校ってどんな学校?

奈良校は正式には「奈良分室」で、以前はワンフロアの学校でしたが、この度移転をし六階建ての学校に変わりました。自然一杯の「なら公園」や東大寺などの歴史に囲まれた中に位置しています。

## 奈良校の特徴

奈良校の特徴として、新入生を中心に毎週一日、ス



クーリング以外の曜日レポート学習を行っています。レポート出力の方法から自分の登校する日の時間割の

作成、レポートメ切日に間に合うように時間を決めて各自がレポート学習をします。レポート相談があれば、生徒ができるまで教員がサポートします。そうすることで、生徒が気軽に質問できる環境ができました。時に厳しくもありますが、生徒と教職員との間に暖かい人間関係がこの学校にはあります。

## 奈良校の雰囲気

生徒は、全体的に真面目な感じを受けます。また、生徒たちは授業中と休み時間のけじめをきちんとつけてくれているため、学校に通いにくかった生徒もそうでない生徒もみんな楽しくアットホームな雰囲気です。学校生活を楽しんでいます。

## 特徴的な科目・特別活動

奈良校の特徴的な科目と云えば、総合学習の「世界遺産講座」と「奈良を習おうー奈良学入門ー」、「奈良の文学散策」ではないでしょうか。奈良には古代からの貴重な遺産が数多く発見され残されています。

「世界遺産講座」では、奈良で登録されている世界遺産を視聴覚資料で学んだあと、実際に校外学習に出て奈良の世界遺産を見学します。



「奈良を習おうー奈良学入門ー」は、今年の遷都一三〇〇年にあわせて開講された新しい科目であり、奈良についてより深く学習する科目です。

「奈良の文学散策」は、日本最古の文学資料である『古事記』と『日本書紀』を中心に学習します。「古事記」「日本書紀」が描く古代やそれらが記す日本の歴史を学びます。後期に開講されるこの科目にも校外学習があります。今回は、遷都一三〇〇年祭が開催されているので、平城宮跡探訪ツアーと平城京歴史館見学を予定しています。当時の人々が築いてきた

歴史を学び、文化文明・文学について興味を持つてほしいと考えています。

特徴的な特別活動としては、奈良ウォーキングを挙げることが出来ます。前期は学校を出発して、観光名所である元興寺から興福寺五重塔に行き、休憩。一の鳥居をくぐって、春日大社を目指し、春日大社まできたら、二月堂、東大寺大仏殿、ゴールの南大門目指して歩きます。距離は長く感じますが、木々に囲まれた空気のいい道が多いので、気持ちよく歩くことができます。また、ゴール地点である南大門には、まるで出迎えてくれているように、鹿がたくさんいます。



## 校内の写真(一部紹介)

### 401教室(4階)

ここは、情報に関する授業や視聴覚機器を使用する授業が行われます。



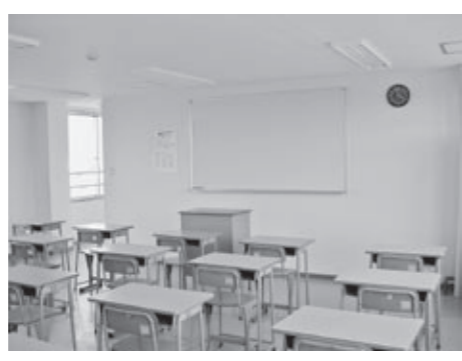
### 501教室(5階)

201教室(2階)と同じ様式です。



### 602教室(6階)

6階は2つ教室があり、この教室の東側に601教室があります。



その他、3階には自習室、進路コーナー、図書室があります。自販機も設置されているので、生徒たちにとってちょっと一休みできる空間になっています。



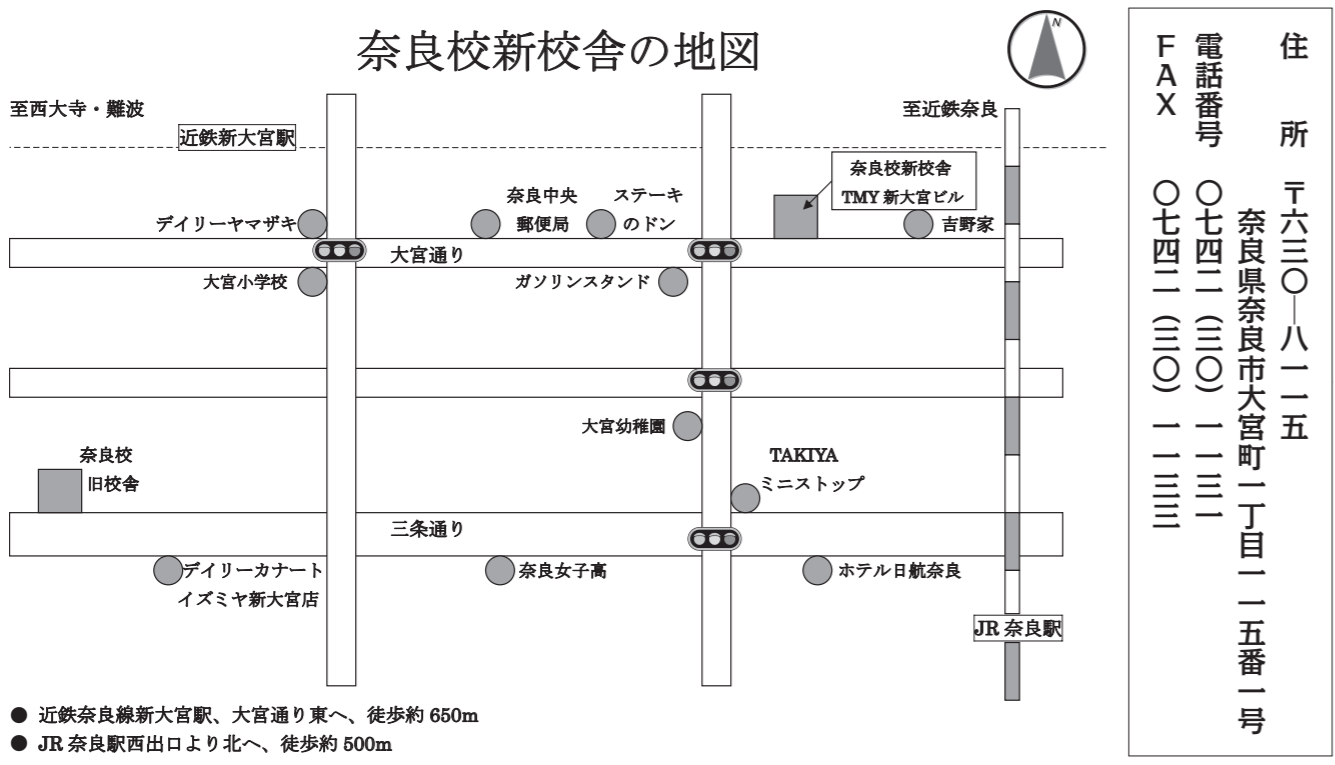
## 奈良校の教職員紹介

- 右から
- ・ 経理事務 谷 佳子
- ・ 英語科 久村 裕美
- ・ 社会科 堀家治代子
- ・ 体育科 宝田 敏清
- ・ 教務事務 森 啓子
- ・ 体育科 小松 義昭
- ・ 国語科 黒田 優香

右記の7名と非常勤講師18名の教職員が、皆さんの単位修得・卒業をサポートします。奈良校は、明るくて生徒ものびのびと過ごしている学校です。



## 奈良校新校舎の地図



◎陸上部

第45回全国高等学校校定時制・通信制陸上競技大会

八月十三日～十五日  
国立競技場  
一五〇〇m  
【六位入賞】  
藤井 昭夫

顧問(京都校教員) 渡邊千恵美  
八月十三日から十五日まで、国立競技場において第45回全国高等学校校定時制・通信制陸上競技大会が開催され、京都府団の代表として京都校の藤井昭夫君が一五〇〇m・五〇〇〇m走に出場しました。今年の異常ともいえる暑さの中、観客席で応援する私たちより、競技場内のトラックはもっと暑かったことと思います。しかし、その暑さを諸ともせず競技に臨む姿には感心させられ、一五〇〇m決勝で6位入賞を果たした時には感動を覚えました。この大会での経験が藤井君の今後の自信につながることを願ってやみません。また、今後の競技会では自身の記録に挑戦してくれることを願っています。

藤井昭夫君(京都校)のコメント

「目標にできてきたこの大会で、納得できる記録を残せたことをとても嬉しく思います。一年後の最後の全国大会に向けて、また一つずつ積み重ねていきたいです。」



◎水泳部

大阪高校総合体育大会水泳競技大会兼大阪高校選手権水泳競技大会兼近畿高校予選会(第5地区大会)

六月二十日  
なみはやドーム  
サブプール

- 【一〇〇m自由形 1:00.76】
- 【四〇〇m自由形 5:07.56】
- 藤井 昭夫
- 【五〇m自由形 26.53】
- 【一〇〇m自由形 1:00.85】
- 四宮 正貴

大阪高校総合体育大会水泳競技兼大阪高校選手権水泳競技大会兼近畿高校予選会(中央大会)

六月二十五日、二十六日、二十七日  
なみはやドーム  
メインプール

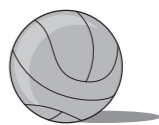
- 【一〇〇m自由形 1:02.54】
- 【四〇〇m自由形 5:07.56】
- 藤井 昭夫
- 【五〇m自由形 26.85】
- 【一〇〇m自由形 1:01.72】
- 四宮 正貴

平成二十二年度 全国高等学校校定時制通信制体育大会 出場クラブ試合結果

◎バスケットボール部

七月二十八日～三十一日  
東京体育館

【出場】



八月十七日～二十日  
小田原アリーナ

◎バドミントン部

団体男子大阪選抜  
【ベスト16】

國弘 宗太  
大石 経裕  
小谷 眞輝

◎バレーボール部

八月五日～八日  
平塚アリーナ



【ベスト16】

団体女子大阪選抜  
【ベスト16】

大林実那子  
安田 清華

◎卓球部

八月九日～十二日  
駒沢オリンピック公園総合運動場体育館



祇園祭三〇〇〇

京都校教員 新井 雅人

平成二十二年七月十七日(土)に日本三大祭の一つである、祇園祭の山鉾巡行が京都市中心部で行われました。

祇園祭は、「雨の祇園」と言われるように、梅雨の時期と重なっています。今年も巡行前日まで、雨が降っており、当日の天候も危ぶまれました。

しかし、巡行当日は、梅雨も開け、晴れ渡る空の下、本校の男子生徒十三名と教員二名がその巡行に参加しました。

当日は朝七時半集合、生徒達は眠たい目をこすりながら



から集まり、着慣れない股や足袋を身に着けました。私達教員は、紋付き袴の衣装を、地元の方々に着付けていただきました。私が非常に驚いたのは、「身に着ける着物の枚数と着物の着づらさ」です。あれほど暑く、歩きにくいものだとは思いませんでした。ただやはり、着慣れない衣装を身に着けると胸が躍りました。生徒達も着慣れない衣装が嬉しいのか、いつもよりもテンションが高かったです。

町内の方々も一緒に全員で記念撮影をし、九時過ぎに蟻山と共に、京都校の前を出発しました。巡行中は梅雨開けが発表されたということもあり、猛暑でした。生徒たちは暑さと重さに耐えながら、一生懸命に歩きました。

約三時間かけて京都校付近まで帰ってくる頃にはもうへとへとで、生徒達も早く座りたいという顔をしていましたが、何とか京都校までたど



り着きました。教員や町内の方々の拍手で出迎えられた、十三人の男子生徒たちの顔はとても清々しいものでした。しんどかったという声がほとんどでしたが、やってよかったという声も聞こえてきました。私もやってよかったなと思います。二つの意味で「アツイ」一日でした。

女子の方は七月十四日～十六日にかけて蟻山の手拭いや粽(チマキ)、おみくじなどの販売のお手伝い(売子)をしました。あいにく天候には恵まれなかった生徒もいましたが、二十二人の生徒が一生懸命蟻山を見に来た方々へ笑顔を振り舞っていました。

海外からのお便り

京都校 馬場 玲佳

オーストラリアについて瞬間に、「私、一人なんや。」と実感する出来事がありました。ゴールドコーストに着くはずの飛行機が大雨の影響でブリスベンに着陸していたのです。自分のホストファミリー宅まで送り届けてもらえるはずのドライバーはゴールドコースト空港で私を待たず、私はブリスベン空港でただ「どうしたらいいの?」とつぶやき、空港のスタッフにまだ何も英語がわからなかった私は「I want to go to goldcoast airport」と言い、答えてもらった英語は何もわからないまま、そこに停まっていたバスに乗り、ゴールドコーストへ行ってもらう、ホストファミリーにやっと会えたのが私の旅の一番初めの経験です。

学校での生活は、韓国人、中国人、日本人、ロシア人、タイ人などたくさんの国の友達ができました。しかし、はじめは友達になりたくても英語が話せないと自分の思っていることも、知りたいことも、相手のことも何も知ることができない状況で日本人の友達とずっと一緒に、初めての一月はまるで長期旅行のような気分でした。一ヶ月経った時、自分はこのままでは何

も成長しないまま帰ってしまう。とやっとなり、日本人が寄って来ないように、韓国人のボーイフレンドを作りました。それからはその人とずっと一緒に、「話せないから話したくない。話さない。」が、「話したいこといっぱいあるのに下手くそな英語。」と変わっていき、気がつけば下手な英語でも自然と英語で話している自分がそこにいました。

オーストラリアで出来た勉強や経験は、とても大切で貴重なものです。一番嬉しかったことは、初めて本当になりたかったこと、そして、離れてやっとなった家族や友達の大変さ。もう一つは、外国の方が「thanks!」とすぐ言うように今私が「ありがとう」とすぐ口にできるのは、オーストラリアに行って学習できたことじゃないかな?と思っています。



一番手前に写っているのが馬場さん本人です。

特別活動

読書感想文より 『インパラの朝』を読んで 梅田校 千家 綺乃

この本は25歳の日本女性による2年にわたる旅行記である。読んでいた途中、こんな若い女性が一人で英語を話し、戦争の真っ只中の国々を始め、世界中をほとんど行きあたりばつたりで国境を越えたりするあたり、すごいなあと思った。私があと10年経たないうちに、こんな度胸がつくのかなあと思うとちよつと無理な気がした。

この人のすごい所は、一見何も考えていない無計画の旅であるように見えて、しっかり自分の人生観を持っている所だ。私を含め、ほとんどの若者は、平和な世界で生きる事を好む。でも、この人はTVでイラクの人の質のニュースに世間が冷笑しているのを見て、自分も不運にも事件に巻き込まれたら、日本での激しい批判と非難が待っているだろうと考える。それでも「少なくともTVの前でポテトチップスを食べながらぼんやりと座っていたのではなく、世界を知ろうとする試みの志半ばで敗れる方に価値を見出し」ているのだ。そして、情勢が不安定な国

へ入国するために、2回も偽装結婚、離婚を繰り返して、平然とバツ2にもなっている。この本を読んでいると、人間その気になれば何でもできるじゃないかと思えてくる。 私は今バンドを組んで音楽をやっている。この人のように世界中をバググ一つ抱えて放浪するような旅はできないかもしれないが、いつか自分も今暮らしている狭い視野から飛び出していきたい、とこの本を読んで強く思った。でもそのためには、自分が何をしたいのかをまず明確にするべきだ。

特別活動

読書感想文より 『晩年』を読んで ナンバ校 宮谷 行美

私は今回、太宰治の『晩年』を読んだ。太宰治の作品は中学生の時の国語の授業で『走れメロス』を勉強した際に読んだきりで、その時に太宰に興味を持って、『斜陽』を購入したが未だに読んでいない。そんな中で太宰自身初めての短編集であり自伝でもある『晩年』を読んだ。 全ての話において太宰の表現方法は独特である。比喩表現が上手でもあり、また情景を伝える表現が多く思えた。だからこそ提示された太宰が見た同じ景色を脳に再生しつつ、彼の伝えたい「真実」を探す。これが非常に面白いと思った。比喩表現といえば『猿が島』である。初めから読んでいると既存のイメージによって「私」のことを「人間」と思いがちであり、表現でさえ「人間が見た島」に感じるものをそのままであったりもする。しかし、比喩表現だからというわけではなく、本当にそれが島だと思えるものなのかもしれない。これは動物園の話であり、「私」が動物園の猿の檻に入れられた話だ。最初は状況が

へ入国するために、2回も偽装結婚、離婚を繰り返して、平然とバツ2にもなっている。この本を読んでいると、人間その気になれば何でもできるじゃないかと思えてくる。 私は今バンドを組んで音楽をやっている。この人のように世界中をバググ一つ抱えて放浪するような旅はできないかもしれないが、いつか自分も今暮らしている狭い視野から飛び出していきたい、とこの本を読んで強く思った。でもそのためには、自分が何をしたいのかをまず明確にするべきだ。

この本の中でインドの孤児院でボランティアをしている時の話があった。そこでは他国の女性と相部屋で、陰気くさい共同部屋に住み、宿の共同トイレの中でバケツに水をためてシャワー代わりに浴びていた。私なら一月もたないところだが、彼女は「私はただ毎日疲れて眠りたい」「今日も自分は頑張った」「つてそういう疲れを体感して夜は眠りたい。ただそれだけ。」とあつけらかんと語っている。

把握できず「ここはどこだ」という疑問しかないが、それを理解した時に芽生えた恐怖。その後の脱走。これらの感情は人間の生きる毎日にもある。それを太宰は動物園の猿の檻の中、つまりは猿が島にたとえている。「私」は生活には困らないがその場所から逃げた。それは狭い檻の中で見世物として生きていくことからの脱却である。この話自体も自伝に含まれるというならば、太宰自体も脱却したいという気持ちがあったのだらう。日本あるいは地球という限られた中で、毎日同じことをして暮らすことへの嫌気を訴えているのではないかと私は感じた。

また、『猿が島』に続き、私は『雀こ』も好きである。津軽弁で軽快なリズムで構成されているが、内容としては少し切ないと思った。その理由としては、花いちもんめをする子どもたちの中でマロサマは最後まで誰にも選んでもらえないからである。そしてそのマロサマの孤独感を太宰は伝えたかったので

私はこの考え方はよく分らない。私の価値観にはもちろんお洒落も入っている。それなりに恵まれた生活も不可欠だ。この人のように湿った場所に住み、ただ人の為は無償で尽くすことには価値を見出せない。でも、と思う。何に価値を見出すかは人それぞれ違うけれど、結果それが人の為になつていたいと思う心は同じではないか、と。私の好きなダンサーの言葉に「過程は我が為、結果は人が為に。」というのがある。スポーツや仕事、何をするにしてもその過程において、自分が学び成長することを重視する、そうしたら結果として人を喜ばすことが自然についてくる、というものが自然についてくる、というのだ。自分はこの本の人のような崇高なボランティア活動はできそうにないけれど、自分の好きな音楽をしっかりと勉強する、そして結果として人に何か伝えることができればそれでいいと思う。そういう所でこの本の作者と自分とはつながっていくのではないかと思つた。

そのいう意味でこの本は自分の今の生き方、そして10年後の自分の生き方を見つめ直す機会をくれた価値のある一冊だつた。

め。夢や目標は黒ペンで記入し、叶った内容には赤ペンで「ありがとうございました」と書き添える。内容はその日のうちにやりたいことから長期的な目標、壮大な夢まで自由に書きいれ、それを「緊急重要」「緊急」「重要」「その他」に振り分ける。そして、過去のことは書かずに未来のことだけを書く。これが彼女流の「夢ノート」です。 私も目標があります。「夢ノート」をスタートさせて赤ペンで

あると思う。また、すぐに選ばれるタキの存在は劣等感を表しているだろう。マロサマがタキを選んでくれてくれないこと、そしてマロサマが泣くと周りがからかうこと。この点に関しても切なさを感じた。それに加え、はじめと終わりの言葉と一緒にすることで生まれたリズム。そして津軽弁での親しみある表現。これらを合わせて好きだと思つた。

読書案内 24

「奇跡の夢ノート」 石黒由美子 ナンバ校 保健体育科 三田村優子

私がこの本を手にとったきっかけは、本についている帯に「シンクロでオリンピックに出る！」交通事故で瀕死の重傷を負った少女は「夢ノート」に綴る」と書かれていてその中の「夢ノート」という言葉に興味を持ったからです。筆者、石黒由美子さんは帯に書かれている「シンクロでオリンピックに出る！」という夢をかなえ、実際に世界の舞台に立った北京オリンピックのシンクロ日本代表選手です。

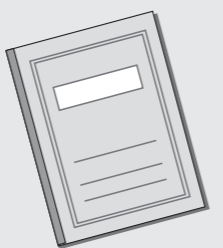
彼女は小学校2年生のときに交通事故に遭い、顔だけで540針、口の中は260針も縫う7時間の手術をし、過去の記憶も失いました。事故で三半規管を損傷し、まっすぐ泳ぐことができません、シンクロなんてできるはずのない状況を乗り越え代表の座を勝ち取りました。

彼女の日常生活に復帰するまでの苦労、オリンピックに出場するまでの壮絶な人生がこの本にはつまっています。今回は「夢ノート」に焦点を合わせたと思います。

「夢ノート」を書き始めたのは彼女の母の影響で、彼女の母がその日やらなければならぬことなどを書いておりこれを真似て始めたのが「夢ノート」です。「お花屋さんになりたい」など園児らしい夢から始まり、オリンピック出場後の今もお綴られ続けています。

彼女は北京オリンピックのあと神戸学院大学の博士課程に入学し、並行して小学校の非常勤講師を勤めています。 最後に彼女は「夢ノート」をすすみたい人や「夢ノート」を書くときのポイントを綴っているので紹介したいと思います。

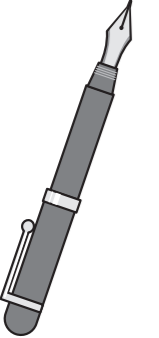
「ありがとうございます」と書くようになります。書いています。ぜひみなさんも「夢ノート」を書き始めてみてください。ノートは誰に見られることもない自分だけのもの。だからこそ正直に自分の思いをかけるのではないだろうかと思えます。



特進クラス（梅田校で実施）

特進クラスに在籍する三年次生にとつても、まもなく受験シーズンがスタートします。ホームページでもその様子が紹介されていますのでご覧ください。 また、二〇一二年度入試を目

指す生徒の募集もまもなく開始します。各校で説明会が行われる予定です。連絡便など郵便物で案内していますが、詳しいことは、各校特進クラス担当の教員にお尋ねください。



特進クラスについて... 梅田校 宮谷 行美

# High School Memories

## 高校生の頃

47

### 高校生のみんなに伝えたい

京都校 東野 嘉秀先生(芸術科)



「わかりません。」  
高校生活で何回言ったかわからないほどルーティンのように吐き続けたセリフ。

小学校は近くに住んでいた幼なじみが行くと言った私立の小学校に「じゃあ僕も行く」と軽すぎる考えで入学。この頃から家で勉強するのは苦手だったが、子ども独特の純粹さで授業だけは集中して聞いていた。そのおかげで成績は悪くなかった。

中学校に進学するときにあって、私立の小学校に通っていたために近所に友だちがいない現実には直面。「おまえ、公立の中学校に行つたらいじめられるぞ」と父親からおどしを受け、勉強は嫌いだだったが中学受験を決意。高校は受験しなくても済むように中高一貫のいわゆる進学校に

進学した。

小学校ではさして努力をしなくても成績は悪くなかったため、自分の能力を過信していた。自分は神に選ばれた天才だとも思っていたかもしれない。勘違いもはなはだしい子どもだった。できることならあの頃の自分に夜が明けるまで説教してやりたい。小学生の頃と同じ調子で遊びたいだけ遊び続け、当然成績は下がり続けた。それでも時折思い出したように試験前だけ勉強しては一教科だけ飛びぬけた点数を取ったりして「やっぱ自分はやればできる」と勘違いを加速させた。

そして、高校に入る頃には手遅れになっていた。

授業を聞いてもよくわからない。つまらない。と感じるようになり授業中は寝ているか、らぐがきをしていることが多かった。相変わらず成績は悪化の一途を辿っており、ついには進

級も危ういような低空飛行となっていた。よく墜落しなかったものだと今になって思う。

高校三年になっていよいよ受験という頃になってもまったく勉強の習慣は身につけていなかった。それまで一緒に大阪城公園でサッカーボールを追い掛け回していた仲間もすっかり受験モードになってしまい、取り残された気分になった。今では基本的には超がつく程のインドア派なので、この話をするとなかなか信じてもらえないのだが、高校生の頃は十分の休憩時間でも外でサッカーをしているような生徒だった。本当は幼少の頃から甲子園に連れていかれ、阪神ファンとしての英才教育を受けていたので野球の方が好きだったのだが、友人がサッカー派だったことと道具がボール一つで良いこともありあまり野球はする機会がなかった。ならばクラブ活動でやれば良いと言われそうだが、私に通っていた学校では野球部は坊主頭だったので野球部に入部する気もなかった。体育会系は上下関係が厳しいというイメージがあつて、それを敬遠したというのもあつた。

進路の話を本格的にする時期になり、出した結論は「美術系の専門学校に行く」ということ

だった。小さい頃から絵を描くのが好きで、それだけが取り柄と言えるものであった。なぜ美術系の大学ではなく専門学校だったかと言うと、学科試験に受かる自信が無かつたからである。この期におよんでも勉強することから逃げていた。漠然と「絵を描くことを仕事にできればいいな」という甘い考えでいた。進学校だったので、専門学校に行く生徒もその年では私一人だったかもしれないがそんなことは気にならなかった。

そして、現実と自分の甘さを知ることになる。

「高校生の頃」というタイトルからは少し逸脱するが、努力というものをしなかつた生徒がその後どういふ人生を送つたかを書くので反面教師として欲しい。

専門学校に入つてまず思い知つたのは、絵だけで食べていくことがどれ程厳しいかということだった。根性のない私はプロのイラストレーターの話聞き、その技量を知り、あっさりその道で生きていくことを諦めた。逃げっぱなしの人生である。デザイナーとして就職することを選び、小さなデザイン事務所に入った。そこで人生最大の挫折を味わうことになった。

朝は九時に出社、夜はほぼ毎日終電。帰れるときはまだ良い方だった。残業代はつかず、それどころか会社の経営状態が悪化し、給料の支払いも滞りがちになった。ここに来て人生で最大の根性を見せたが、心身ともにボロボロになっていた。結局、労働基準監督署の指導が入るような事態になりいよいよ会社が傾いたことで、退社の決意をした。この時は「また逃げ出してしまった」という思いからくる悔しさと、解放されたような気持ちになりホッとしたのが同時に襲つてきて涙が止まらなかつたのをよく覚えている。その後半年ほど何もする気にならず、遂方に暮れていた。

人生においてこの経験が無駄になつたとは思わないし、後悔もしていないが、高校時代にもっと努力していればこんなやりきれない思いはせずに済んだかもしれない。

高校生の自分に説教することは叶わない。でも、現役の高校生に伝えられることはあるかもしれない。そんな思いを抱いて教師を目指し、大学に入りなおした。そして、今、長尾谷の教師としてこの場にいる。

生徒の君たちに伝えたい。「俺のようにはなるな。」